

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

「語りえぬもの」を語る行為とその思想表現に関する学際的研究—禅の言葉と翻訳を中心
課題として—

An Interdisciplinary Study on the Behavior and Expression concerning "What We Cannot
Speak About" - with a Focus on the Language and Translation of Chan/Zen Buddhism

2. 研究代表者氏名

何 燕生

HE, Yansheng

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(3年目)

4. 研究目的

グローバル化やAI化が進む現代社会において、そもそも「言葉」と「翻訳」にはどのような意味があるのか。本研究は、「言葉」と「翻訳」という古くて新しい問題を東アジアにおいて形成された禅仏教をケースとして考察することを目的とする。禅は、「不立文字」と言い、言葉を否定的に捉えようとする一方、語録や公案、灯史など膨大な量の言葉群を残している。矛盾にも見える禅と言葉とのこのような関係を一体どのように捉えたらよいのか。「語りえぬものについては沈黙せねばならない」という捉え方があるが、禅では、沈黙だけでなく、時には「道え!道え!」と、語ることも求められる。一方、和語、漢語および近世中国の俗語を駆使して必死に語ろうとしたのは日本の禅僧道元だが、道元による禅の日本語化の持つ意味は一体何なのか。さらに、近代では禅が欧米へと「翻訳」され、英語、フランス語などの言語で語られ、異文化との接触によって脱文脈化しつつある。禅のそうした「越境性」について、またどのような分析枠が可能であろうか。本研究は、これまでの研究を踏まえ、今日的な問題をも視野に入れて、禅の「言葉」と「翻訳」の問題をめぐり、国内外の研究者との連携をはかりながら、学際的に研究するというものである。

Against the backdrop of globalization and evolution of AI in modern society, what is the ultimate significance of “words” and “translations”? In this study, the author focuses on the issue of “words” and “translation” and analyzes examples found in Chan/ Zen Buddhism. The core concept of “No attachment to words” (不立文字) in Chan Buddhism is indicative of a negative attitude toward “words”, whereas a voluminous amount of direct quotations from Buddhist monks, koans(公案), and Buddhist lineages are well preserved in documents. To

what extent could we understand and explain this paradox? One opinion highlights the fact that “one must be silence about what cannot be spoken of” (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen). It is undoubtedly true that silence is emphasized in Chan/Zen Buddhism, yet occasionally a practitioner is also required to “speak”! The Japanese Zen Master Dogen completed very important Japanese works by incorporating Japanese, Chinese and medieval Chinese vernacular terms into his discourse. What is then the role that Dogen played in the Japaneseization of Zen? Since Chan/Zen has been introduced to the West through translations in modern times, Chan/Zen Buddhism in the English and French contexts is being decontextualized along with its contact with different cultures. What is the effective analytic method for the nature of “cross-boundary” in Chan/Zen? In this present interdisciplinary study, the author works with domestic and foreign scholars to address the issue of “words” and “translation” in Chan/ Zen Buddhism.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は実施計画に基づき、4回の研究会および最終年度の国際研究集会を実施した。研究会はこれまでと同様、午前は『弁道話』の会読を実施し、午後の報告会では二発表を設け、それぞれにコメンテーター、司会者を配置して行うという学会形式を取った。それにより、三年間で多くの班員がそれぞれいずれかの形で研究会に参加することができた。また、中途の成果発表も行った。具体的には、岩波書店の『思想』(一二〇五号)に「道元の思想」という特集を企画し、班員11名が寄稿した。

6. 本年度の研究実施内容

2024-04-27 禅研究班第10回研究会 Xingjiao 行脚 and the Images of Chan Practice in Modern China 発表者 沈庭 班員・武漢大学副教授/東北大学リサーチフェロー コメンテーター Wittern, Christian 副班長 京都大学教授『玄天上帝説報父母恩重經』を巡る諸問題—「始相」の語を中心に 発表者 山田 俊 班員・熊本県立大学教授 司会 何 燕生 班長・郡山女子大学教授 コメンテーター 福谷 彬 京都大学准教授

2024-06-22 禅研究班第11回研究会 「自著を語る」：『風姿花伝研究』の内容紹介—世阿弥の能楽論とその思想的環境 発表者 重田 みち 班員・京都芸術大学教授 コメンテーター 吉村 均 公益財団法人中村元東方研究所専任研究員 司会 齋藤 智寛 班員・東北大学大学院教授 忘れられた道元研究者—人類学者岩田慶治の道元論について— 発表者 何 燕生 班長・郡山女子大学教授 コメンテーター 水野友晴 班員・関西大学教授 司会 古勝 隆一 所内班員・京都大学人文科学研究所教授

2024-10-26 禅研究班第12回研究会 道元周辺の臨済禅 発表者 和田有希子 班員・早稲田

大学招聘研究員 コメンテーター 末本文美士 研究班顧問・国際日本文化研究センター名誉教授 司会 古勝隆一 所内班員・京都大学人文科学研究所教授 一休と浄土教—その法然への評価と遊女の位置づけ 発表者 飯島孝良 班員・花園大学国際禅学研究所准教授 コメンテーター ダヴァン・ディディエ 班員・国文学研究資料館准教授 司会 水野友晴 班員・関西大学教授

2024-11-30 禅研究班第13回研究会 『修禪要訣』の諸本 発表者 程 正 班員・駒澤大学仏教学部教授 コメンテーター Wittern,Christian 副班長・京都大学人文科学研究所教授 司会 末本文美士 研究班顧問・国際日本文化研究センター名誉教授 『正法眼蔵』 仏経巻に関するメモ—中国書物史の視点から 発表者 古勝隆一 所内班員・京都大学人文科学研究所教授 コメンテーター 齋藤智寛 班員・東北大学大学院文学研究科教授 司会 赤松明彦 研究班顧問・京都大学名誉教授

2025-02-15 公開国際シンポジウム 語り得ぬものを語る—グローバル時代の禅の言葉と翻訳 語り得なかったものを語る:道元の『真なる自己』のトロープ解釈 発表者 出口康夫 班員・京都大学 「宋代文字禅の思想史的考察」 発表者 龔雋 班員・広州/中山大学 「道元を英訳する」 発表者 Wittern,Christian 副班長・京都大学 「翻訳を哲学する—西田哲学における言語化の問題に基づいて」 発表者 上原麻有子 班員・京都大学 「馮友蘭の哲学における禅」 発表者 齋藤智寛 班員・東北大学 コメンテーター 石井清純 班員・駒澤大学 コメンテーター 氣多雅子 研究班顧問・京都大学 コメンテーター 山田俊 班員・熊本県立大学 司会 石井公成 研究班顧問・駒澤大学 永明延寿による仏教の再編: 禅による教・律・浄土の捉え直し 発表者 柳幹康 班員・東京大学 道元における言語の位置づけと体用論批判について 発表者 長野邦彦 お茶の水女子大学 虎関師錬の禅思想における言葉 発表者 佐久間祐惟 東京大学 コメンテーター 土屋太祐 班員・新潟大学 コメンテーター 頼住光子 班員・駒澤大学 コメンテーター 和田有希子 班員・早稲田大学 司会 末本文美士 研究班顧問・国際日本文化研究センター

7. 共同研究会に関連した公表実績

- ・岩波書店の『思想』(一二〇五号)に「道元の思想」という特集を企画し、班員11名が寄稿した。
- ・二〇二五年二月十五日に、北白川にある人文研の分館を会場に、「語り得ぬものを語る—グローバル時代の禅の言葉と翻訳」という公開国際シンポジウムを開催した。海外からの招聘班員、並びに国内の班員を含め、四十名が参加し、議論を交わした。歴史的な建造物での開催はもちろん、充実した内容の発表、コメント、質疑応答を行ったこと、これをもって研究班の有終の美を飾るには余るものがあり、まさに盛会であった。

8. 研究班員

所内

WITTERN, Christian、古勝隆一

学内

上原麻有子(大学院文学研究科)、出口康夫(大学院文学研究科)、中村慎之介(文学研究科)、
フランシスコ・フィゲラ・メディナ(大学院総合生存学館 (思修館))

学外

何燕生(郡山女子大学)、一色大悟(東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付
研究部門)、頼住光子(東京大学大学院人文社会系)、斎藤智寛(東北大学大学院文学研究科)、
柳幹康(東京大学東洋学研究所)、浅見洋二(大阪大学大学院文学研究科)、土屋太祐(新潟大
学経済学部)、山田俊(熊本県立大学)、余新星(花園大学文学部)、小川隆(駒澤大学総合教育
研究部)、石井清純(駒澤大学仏教学部)、角田泰隆(駒澤大学仏教学部)、安藤礼二(多摩美術
大学美術学部)、飯島孝良(花園大学国際禅学研究所)、重田みち(京都芸術大学通信教育学部)、
水野友晴(関西大学文学部)、和田有希子(早稲田大学)、小川太龍(花園大学)、早川敦(東北福
祉大学)、ディティエ・ダヴァン(国文学研究資料館)、李家明(国際日本文化研究センター大
学院)、今西智久(株式会社 法蔵館)、金子奈央(公益財団法人 中村元東方学研究所)、周裕
鍡(四川大学)、王頌(北京大学)、呉根友(武汉大学)、龔雋(中山大学)、馮国棟(浙江大学)、
李建欣(中国社会科学院)、江静(浙江工商大学)、蒋海怒(浙江理工大学)、ジャン＝ノエル・
ロベール(コレージュ・ド・フランス)、ベルナールフォル(コロンビア大学)、呉疆(アリゾナ
大学)、ラジ・シュタイネック(チューリッヒ大学)、ゲレオン・コブフ(ルター大学)、スザ
ナ・クボウチャコバ(マサリク大学)、林佩瑩(政治大学)、肖琨(暨南大学)、李瑄(四川大学)、
張超(フランス国立高等研究実践学院)、沈庭(武汉大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
人文研所属 (内女性)	1	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	2	4 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	20 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (0)
国立大学 (内女性)	4	6 (1)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	30 (5)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	8	12 (3)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	26 (9)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	2	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	2	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	17	19 (3)	0 (0)	5 (2)	0 (1)	0 (0)	43 (9)	0 (0)	11 (6)	0 (3)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	37	48 (10)	0 (0)	8 (2)	0 (1)	1 (0)	146 (34)	0 (0)	21 (6)	0 (3)	5 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	12		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	5		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	東北文化資料叢書(第14集)	1	2024.4	日本で隠元禅師を探すー仙台両足山大年寺の「黄檗縁」	何燕生
2	Transcending Boundaries: Premodern Cultural Transactions across Asia, Essays in Honour of Osmund Bopearachch	1	2024.7	From a Japanese Royal Portrait to Tang Imperial Murals: On the Pattern of Transmission in Antient East Asia and the Silk Road,"	林佩瑩
3	思想(1205号)	1	2024.9	禅と人類学の地平ー岩田慶治の道元論を読み直す	何燕生
4	思想(1205号)	1	2024.9	「討議」自己・他者・世界ー道元の思想を読み直す	何燕生(企画・司会)

5	思想(1205 号)	1	2024.9	道元を翻訳する	クリスティアン・ウィッテルン
6	思想(1205 号)	1	2024.9	「討議」自己・他者・世界—道元の思想を読み直す	<u>末本文美士</u>
7	思想(1205 号)	1	2024.9	「討議」自己・他者・世界—道元の思想を読み直す	出口康夫
8	思想(1205 号)	1	2024.9	道元思想における悟りと実践—世界と自己の関係	石井清純
9	思想(1205 号)	1	2024.9	「行持道環」とは何か—道元の思想構造	頼住光子
10	思想(1205 号)	1	2024.9	「物」から見た道元の思想	ラジ・シュタイネック
11	思想(1205 号)	1	2024.9	鎌倉思想から現代哲学へ	ゲレオン・コプフ
12	思想(1205 号)	1	2024.9	道元の自然観に関する研究史	李家明
13	思想(1205 号)	1	2024.9	道元周辺の臨済禅は何を語ったか	和田有希子
14	従昭和到令和: 如何理解當代日本の轉變	1	2024.10	日本當代宗教	林佩瑩
15	宝生(91 号)	1	2024.11	黒川能：祭礼のなかの芸能	重田みち
16	鍬仙(751 号)	1	2024.12	『風姿花伝』神儀篇著述に協力した知識人は誰か：一条兼良である可能性	重田みち
17	法鼓佛學學報 no. 35	1	2024.12	空海(774-835) 的十住心論：從《大日經》到《秘藏寶鑰》	林佩瑩
18	熊本県立大学文学研究科論集(17 卷)	1	2024.12	『玄天上帝説報告父母恩重經』を巡る諸問題——「始相」の語を中心に	山田俊

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	道元與中国禪思想	何燕生	2024.8	中国大百科全 書出版社	
2	The Philosophy of No-mind: Experience Without Self,	西原直(Translated by Catherine Sevilla-liu and Anton Sevilla-liu)	2024.12	Bloomsbury	○

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

共同研究の成果としては、①論文集である『語り得ぬものを語る一禅の言葉と翻訳の学際
的再検討』（仮）という刊行物を 2025 年度内に刊行する予定である。15-18 名の班員による
執筆で、研究所の共同研究の成果刊行助成金を申請して、法蔵館から刊行するという計画を
進めている。②報告書である『弁道話』の会読の成果を研究所が発行している『東方学報』
もしくは『人文学報』に投稿する予定である。